

「賠償低額 納得いかぬ」

原発避難 いわき訴訟判決

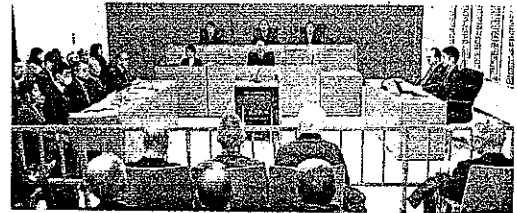
加算150万、70万円

東京電力福島第一原発の事故で避難を強いられた住民ら213人に総額6億1千万円を支払うよう東電に命じた22日の福島地裁いわき支部判決。賠償は命じられたものの求めていた金額との落差に、ふるさとを追われた原告からは不満や怒りの声が上がった。



原告団長の早川篤雄さんを先頭に福島地裁いわき支部までデモ行進する関係者。いわき市平

「家族だけでなく地域や自治体まで壊滅したことを思うと、少ない。あつげにとられた」
小川貴永さん(47)は、東電がこれまで払ってきた賠償金に150万、70万円を上乗せするという司法判断に無念の表情を見せた。
双葉町で蜂蜜づくりや栗、梅を栽培する農家だった。30歳を過ぎてから勤め先を辞め、土地を300万円で購入。蜂蜜は東京の百貨店で5、600本が1週間間で完売するほどの人気だった。「自然が豊かで、近所の人たちも家族のようだった。当時はそれが当たり前だった」。現在はいわき市内の復興公営住宅で暮らす。
原告弁護士団は判決後の報告集会で、「原告の立証、主張に疑問を挟まず、認め一律150万円を上乗



判決の言い渡しを待つ傍聴者ら=いわき市平、代表撮影

せする意義は大きい」と判決に一定の評価を示しながらも、「低額にとどまり、納得がいかない。中間指針に追随しているような印象だ」などとして、仙台高裁へ控訴する方向で協議する方針を明らかにした。

「物事は何事も順調にはいかないもの。いまは試練の時だが、成長できる」と小川さん。「できることがあるなら」と引き受けた原告団事務局次長として仙台までの高裁通いを始めるつもりだ。
富岡町から郡山市へ避難し、家族と暮らす渡辺克巳さん(71)は原発事故で、老舗みそ製造販売会社の経営者だった。40代で高校の英語教師を辞め、みその仕込みのため、朝早く起きる毎日を送りながら、夜は学習塾で英語を教えた。
裁判所はこれまで、原告住民の立ち会いのもと、3日間の現場検証に出かけた。原告世帯の代表者を一人ひとり尋問したりと、訴

えに耳を傾ける姿勢を示してきた。渡辺さんは「責任を明確にする」と、こんな問題を二度と起きないようにする判決をしてほしい」と期待していた。だが、「司法に裏切られた気分」だという。「ここで泣き寝入りしたら、先祖も子孫に顔向けができない」。勝利を勝ち取るまで、仲間と闘いを続けるつもりだ。
(床並浩一、石塚大樹)